

白鳥へと贈る歌

ゆらゆらゆらり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は英雄に、なりたかった。

目次

まほろヒーロー	2	25
まほろヒーロー	1	1

白鳥歌野は、この学校において、いわゆる人気者、あるいは中心人物といった立ち位置を与えられている。

常に活発で誰とでも直ぐに仲良くなるし、休み時間になる度に多くの友達に囲まれわちやわちやと騒いでいるし、成績も大体ダントツで良いものだからどの授業の先生からも非常に覚えも評判も良い。

老若男女問わず人気を獲得する稀有な人間ということだ。

そんな彼女と、僕は一年、二年……と一本ずつ指を折り、ちょうど五本目が折れるくらいの年数、つまり小学校に入学してから彼女とはずっと同じクラスである訳だが、しかし僕は彼女が風邪で休んだところも、ましてやあからさまに落ち込んだり、涙を流したりと、そういった……端的に言えば弱っている部分、というのを見たことが無い。

もつと言えばおおよそ欠点とでも言うべき箇所を、僕は白鳥歌野という少女に見出したことがないのである。

五年間、同じ空間で過ごしていたにもかかわらず、だ。

確かに僕は彼女とは特段仲が良い、という訳では無いがしかし、五年という年月はそれなりの重さを持つ。

それこそ、彼女ほど目立つ存在であれば、当然それに嫉妬する人間も出てくるわけで、そういった関係も考えれば白鳥のこういうところがあんまり……といったところが見えてきても何らおかしいことでは無いのだが、それでも僕は彼女のそういう面を見たことが無かった。

とは言え、彼女に苦手な分野がまったくなく、という訳ではない。

例えば彼女の美的センスはあまりよろしいものではない、それこそ担当の教師が苦笑いを浮かべるほどではあるのだが、しかしそれを欠点と呼ぶのは少し違うだろう。

美的センスなんてものは時代と共に流れていくものだからで、正解というものはどこにも存在しないからである。

これが算数や国語の話であり、まるで計算が出来ない、もしくは漢字が読めない、といったようなものであれば欠点とは言わなくとも、それでも”比較的出来ない部分”として挙げられるかもしれないが、それだつて大体の場合努力でどうにかなるし、そうでなくとも彼女はいつそ完璧と言つてよいほどによく出来ていた。

友達はとても多い、というか少ない訳が無い。

何せ休み時間や帰宅時、掃除の時でさえも彼女の周りには人が絶えず、一人でいる時を探す方が難しいくらいだ。

勿論、上で挙げたようにそのあまりの人気具合や、良く整った容姿、いつそ理想的とも言えるその性格に僻み等を持つ人間はいたが、そんな子達とも仲良くなつてしまえるのが白鳥歌野という人間だった。

僕の主観的に彼女は、完全無欠つてやつなのである。

まあ、主観と言つてもこの認識は彼女と関わりのあるどの人間にも共通する認識であるのは間違いないだろう。

と、まあここまでつらつらと彼女のその超人っぷりを語つた訳だが、上記の通り僕は別に彼女と仲が良いわけでは無い。

むしろ友達であると名乗つて良いのからすら怪しいレベルで、辛うじて知り合い……顔見知りと名乗るがギリギリ許される、その程度の関係だ。

しかしその事実が問題であるかと言えば別にそんなことはない。

ただでさえこの学校に通う生徒は何百人もいるのだ、その中の全員と平等に、仲良しこよしするのは白鳥歌野でも不可能であろう。

そしてそういう不可能であつた存在が、偶々僕みたいなやつであつた、ということである。

そのことに、僕は大きく思ふことはない。

僕が白鳥を人気者だと思ひ、それ以上の感情を持ち合わせないよう

に。
白鳥もまた、僕をただのクラスメイトとしか認識せず、それ以上の感情は持ち合わせないだろう。

だが、それで良いのだ。

彼女は彼女で、自分にとって意味のある人と交流し、僕も同じよう

にするだけで、そうしていつか大人になっていくにつれて互いに忘れていくのだろう。

思い出からも徐々に消え去って、完全にいなくなる。

僕らはそういう関係性なのだ、そのことに悔いも無ければ名残惜しさも無い。

そう、思っていた。

けれども。

夏のある日のことだった。

それを詳しく、しかし端的に言うのであれば、それは僕らの学年が遠足に行った日だった。

当時はちやうど諏訪大社とかいう見ても大した面白みのない、けれどもちよつとした凄みを感じる神社へ到着した頃で、先生の有り難い話なんかをぼおつとしながら聞き流していた日のことである。

突如、世界は揺れた。

否、正確に言えば世界は”激しく”揺れた。

前後不覚、立っていられるかどうか分からないほどに揺れて、揺れて、揺れて、そうして世界は終わりを告げた。

暗く立ち込めた雲に幾つもの穴が空き、そこから終わりの使者が続々と顔を出しその口を大きく開く。

あれは何なのか、と思う暇はなかった。

ただ呆然と見ていればそれは猛然と寄ってきて、そうしてクラスメイトの一人をバクリと、何の躊躇いも無く、何の前触れも無く、その巨大な口に収めたのだ。

人の肉体が弾けて碎ける音が響き渡る、初めて見た人の死体は下半身だけになった女の子で、それも直ぐに食われて無くなった。

自然と、怖いとは思わなかったのを覚えている。

ただ、代わりにああ、ここで僕は死ぬのだ、と思ったことも。

それを証明するように僕の足は一步たりとも動かず、只管に減っていく知り合い、友人を眺めるだけだった。

別に足が動かなかった訳ではない、逃げようと思えば逃げることはできただろう。

けれども、その行為は無駄であると、僕の頭は至極冷静に理解していたのだ。

理解したと同時に、頭のどっかのネジかタガなんか外れて飛んだんだろう。

だからこそその棒立ちだった、前の人生もこんな終わりだったのかな、なんて思いながら呆けたように空を見る。

もしそうだとしたら、僕、運が無さすぎるだろ……と。

そう思いながら視線を走らせる。

終わりの使者は巨大な白い袋に、人の顎をつけたようなやつで、どの生物に似てるかと言われれば返答に悩むような形をしていた。

そんな形容し難い化け物が、徐々に宙を漂いながら寄ってくる。

その巨大な厳つい顎を大きく広げ、呑み込まんと、噛み砕かんと迫ってきて——そして、光が走った。

滑らかに撓った光が化け物を弾き、瞬間それはまるで腐るように溶け落ち消える。

一体何が、と思うのと。

白鳥歌野の姿を目に収めたのは、全くの同時だった。

彼女は今日、着ていた服ではなく、どこか劇の衣装にも見える服を纏っていて、その手には美しく発光する鞭が握られていた。

そうしてそれを振るい、真っ向から化け物共を撃ち落としていく。

それを半ば口を開きっぱなしにしながら見ていけば、彼女は僕を見て、薄っすらと笑みを浮かべた後に此処は任せて、逃げて、とそう言った。

そう、あの化け物共が世界を終わらせる者達だったとするならば、白鳥歌野はその逆で、世界を救う者——いわば、勇者だったのである。

002

「で、お兄ちゃんはさすがごと逃げて隠れて結局助かったって話でしょ？ それもう何度も聞いたよ」

一つ離れた妹——夢見柑菜は窓の外を見ながら平然と、それこそ言葉の通り聞き飽きた、といった様子でそう言う。

「いやいや、妹からの『暇だから何か話して』とかいうありがち、かつ

難易度の高いお願いへの返事としてはパーフェクトな回答だっただろ、何せ10分近く喋り倒したんだぜ？」

「これが初めてならまだしも3回目ともなれば聞き飽きるに決まってるよ……」

当然の感想であつた。

けれども僕には割とこれくらいしか話せるような話題が無かつたし、それを柑菜も理解しているはずであろう。

であれば、こうなるものまた当然であると言えるのではなからうか。

「て言ってもさ、犬だつて歩けば棒に当たる時代だし、お兄ちゃんにも何かあつてしかるべきじゃない？」

「僕と犬を比較するのはよせ、それだと何にも遭遇していない僕が犬以下みたいじゃないか」

というか僕だつて歩けば棒にくらいは当たる、躲しているだけだ。

「いや躲しちや駄目じゃん！ 当たろうよ！」

「ばつかお前当たつたら痛いだろうが」

人もイベントも、棒と変わらず当たれば痛いものだし巻き込まれたらたまつたものではない、そういうものだ。

「もう、めんどくさいなあ……あ、じゃあさじやあさ、白鳥さんと何かあつたりはしないの？ あれから色々手伝いしてるんでしょ？」

「んー、まあ、してないと言えは嘘にはなるが、それでも……その、なんだ、所謂勇者業の方はほとんど手伝えてないからなあ、特に何かあつたりはしないよ」

「そんなもん？」

「そんなもんさ」

意外とね、と付け加えれば柑菜はそつかあ、と残念そうにまた窓の外を見やつた。

そこに広がっているのは何てことのない町並みだ。

けれども妹はそれをどこか懐かしそうに、羨ましそうに見ていた。

否、事実羨ましいのであろう。

何せ柑菜は——愛すべき僕の妹は、この無機質さすら感じる真つ白

な病院から、抜け出すことが中々叶わないからである。

端的に言えば、身体が弱いのだ。

どれだけ弱いのかと言えども、滅茶苦茶弱い、としか言いようがない。

季節の変わりに目には必ず身体を崩し、しかもこじらせる。

頻繁に高熱出して倒れるし、最近だと食べられる量も減ってきていて元から小さな身体が更に細くなっている。

要するに病院とはもう切っても切り離せない、そういう関係性という具合であるのだ。

故に、柑菜はあの日も病院にいて、そして、だからこそ助かった。

僕らのいた神社も、僕らの通っていた学校も、僕らの親が努めていた職場も等しく襲われた。

壊された、殺された、何もかも奪い去られた。

けれども病院だけは無事だった、そのことについて原因を求めるのだとすれば、それは間違いなく幸運であった、としか言いようがない。

そう、幸運だったのだ。

此処が襲われず、柑菜が死ななかつたのは、間違いなくこれ以上無い程の幸運だった。

とはいえそれは不幸中の幸い、というやつにしか過ぎず、僕らはただ親を失い友を失い、そして兄妹は生き残った。

それだけだ。

だからこそまあ、そんな妹のためにも話題を持ってこようと頻繁に街に出ているのだが、この生来から持ち合わせているコミュニケーション能力とかいうやつので、僕は未だに新たな話題を獲得するには至っていないかった。

そう、つまり新たな友人を作れたという訳でも——あ。

そういえば。

「藤森に呼び出されてたなあ、何時の約束だったか」

「藤森って……あの？」

「そ、あの藤森……ええと、そう、水都」

「いい加減、毎日会う人の名前くらいは覚えようよ……」

「いや、ちゃんと思いついたんだろう!？」

それはそうだけど……と言葉を切つて、それからゆつくりと柑菜は「でも今度聞いたらきつと忘れてるよ、お兄ちゃんはそういう人だ……」と言う。

お前は僕を何だと思つているんだ……と僕は、少々ため息ながらにそう返した。

藤森水都。

白鳥歌野のことを、世界を守る勇者と言うのであれば、彼女はその白鳥歌野を支える巫女である。

そう、巫女。

言葉の通り、神に仕える女性。

僕らが今こうして生活している諏訪という地域を、あの化け物共（バーテックスと名付けられた）から守る土地神の声を聞く——即ち神託を受け、それを民に伝える、それが巫女の役割だ。

一見それは簡単なことのようにも思えるが、その実そうではない。僕が言うこの”巫女”という存在は、決して、僕ら……所謂平民が選んだわけでもなく、彼女が神社の家に生まれたからそうなった、とかそういう訳でもないからだ。

つまり、彼女は神に直接選ばれたのだ。

幾ら多くの人がバーテックスに殺されたと言つても、それでもまだたくさんの人が生き残っている。

その中でたった一人しか選ばれなかった、その事実を含めて考えてみればむしろ楽であると思うのはお門違いであるのは言われなくても分かるであろう。

特別、というのはその言葉面だけ捉えれば確かに憧れを持たれるようなモノかもしれないが、しかしそれは言い方を変えれば異端であり、例外なのだ。

彼女の悩みも、辛さも、苦しきも。

僕らのような持たない者には分からない、選ばれていない者には理解らない。

否、それはきつと、同じ”特別”である、勇者にも。

「ていうか、呼ばれてたなら速く行きなよ、待たせてるかもだよ？」
「そうしたいのはやまやまなんだがな……」

ぶつちやけ時間どころか待ち合わせ場所すら覚えていないのである。

「シンプルに最低だ!？」

「ついでに言えば何の用なのか全然予想できなくて行くのがちよつと怖い、はつきり言えば行きたくない」

「情けなさすぎるよおにーちゃん!？」

「いやだつて……怖くないか? 最近良く会うようになった程度の仲の女子に一人、呼び出されているんだぜ……?」

何をされてしまうのか、わかったものじゃないじゃないか!?

「いくら何でもチキンがすぎるよお兄ちゃん……」

ていうか御託を並べてないでさつさと行つてきなよ、実は時間も場所も覚えてるでしょ、と柑菜。

さつきまでのテンションが嘘のように冷たい目線である。

そこにはもう既に、反論が出来るような余地はまるで無くなっていて、僕は溜息混じりに仕方ないか、と席を立った。

そんな僕を見ながら、柑菜は口を開く。

「次は、いつ来てくれる?」

「それ、毎回聞いてくるけど意味あるのか?」

「あーのーの、何事も口に出すことが大切なんだよ」

そう言つて柑菜は外すこと無く僕と目を合わせた。

まるで言わないと帰しはしないと云わんばかりに。

その姿は不可解で、けれどもとても愛らしくて、少し笑った。

「はいはい、じゃ、また明日な」

「うん、また明日! 約束だからね!」

そうして、僕は真っ白な病室を出た。

003

病室を出て、ゆつくりと、静かに扉を閉める。

小さくガタン、と音を立ててちゃんと閉まったのを確認してから、少しだけ立ち止まって上を見た。

そこに何かがある訳ではない、強いて言うのであれば白く明るい蛍光灯と、無機質に白い天井が広がっているだけだ。

では何をしているのか、と言われれば当然、僕は考え事をしていた。柑橘は如何にもお前のことはお見通しだぜ！　と言わんばかりの口調で、ああ言っていたが、正直なところ僕は真面目に覚えていなかったのだ。

いや、これだけの情報だけだと僕が最低な野郎だと思われるかもしれないし、事実そうなのではあるのだが、しかし言い訳だけはさせてほしい。

あの日の僕はちよつと普段とは違った状態に陥っていたのだ。

具体的に言うのであれば、いつも手伝っている農作業に加え、ちよつと色々あつて、あの日僕は……そう、実に、実に疲れていたのだ。

疲労困憊、目を開けるのも辛い、まともに歩くこともできない、そういうレベルで疲弊しきっていた。

そんな中で、藤森に声をかけられたのである。

それも加味して考えれば、情状酌量の余地くらいはあるのではなからうか？

そう、自分を励ましながら一先ず病院を出る、季節は冬の面影をチラチラと見せ始めていた。

つまり、普通に寒い。

もう一枚上に羽織るべきだったかな、なんて余計なことを考えながら、ゆらりと歩き出す。

前述の通り、指定の時間も場所も、僕はこれっぽっちも覚えてはいなかったが、しかしある程度の予想はついていた。

なんせ相手は巫女である藤森だ。

大体的場合において、勇者・白鳥と行動を共にするあの藤森である。となれば必然、今日の彼女も白鳥の近くにいることは間違いないだろう。

あの二人は病的に仲がいい。
それさえわかれば後は簡単だ、この時間であれば、白鳥は間違いなく野菜とイチヤイチャしてる。

あの女、勇者になってから病的なまでに農業に夢中になるようになったのである。

「ま、時間は分かんないんだけど、それはそれ、これはこれってことで」
早速行くか、ともう一言付け足し一歩踏み出すのと同じ時、背後から「夢見くん」と声をかけられた。

その声を、誰かと判断する前に振り向く。

否、その声が誰のものであるか、反射的には理解していた。

だから、その理解を頭で把握する前に、振り向いていた、というのがもつとも正しいであろう。

かくして、そこにいたは今まさに、僕の頭で思い浮かべていた人物であった。

つまり——藤森水都、その人である。

彼女の身長は僕よりは低い（因みに僕は160cmだ、一般的な小学生と比べれば些か大きい方と言っても過言ではないだろう）、そのため、自然と彼女は見上げるように、僕を見る。

「きつと病院にいるなあって思ってたんだけど、すれ違いにならないくて良かった」

そう言って、彼女は安心したようにほっと息を吐く。

その態度を鑑みるに、おそらく僕は約束の時間を余裕でぶちちしていたのだろう。

それを察して、一先ず僕は頭を下げた。

「あー……その、何だ、すまなかった。これはもう、僕が全面的に悪い。好きだけ罵ってくれて構わないし何なら何でも言うことを聞こう……」

と、しよげていく言葉尻をそのままに、そう言えば藤森は少々呆気に取られたように口を開き、それから少し笑った。

なにかおかしなことをしてしまっただろうか？

そう思っていれば顔に出ていたのか、藤森はえっとね、と口を開く。

「うたのんが『あの様子じゃ彼、見事にフォーゲットしてるわよ。だから、待つのはあまり得策じゃないわね』って言ってただけど、本当だったなあって思ってる」

クスクスと、藤森は面白そうに笑う。

それに対して僕は、何て言っているものなのか分からず、少しの気恥ずかしさと共に頭をかいた。

そんな僕を見て、彼女はあ、ご、ごめんね、と言ってからこほん、と一息つき、それから

「伝えなくちゃいけないことがあるんだけど、ここじゃちよつと、その、あまり良くないから、移動しても大丈夫？」

と言って、僕は当然のように頷いた。

そうして歩くこと十数分、僕らが着いたのはここ諏訪で最も立派な神社——つまり諏訪大社上社本宮であった。

木々に囲まれ、薄つすらと陽の光を浴びるその姿はどこか神秘的でもあり——そして、どこか恐ろしげ雰囲気すらある。

とは言えそれは仕方のないことだと言えるだろう。

なぜならここには、僕ら人間が昔から口に出す“神様”ってやつが、本当にいるのだから。

その神の名は——建御名方。

古事記において、大国主神の御子神であり、事代主神の弟神とされている神……まあ手っ取り早く言うのであれば、滅茶苦茶偉い神様の子供の神で、超偉い神の弟の凄い神様である、ということだ。

物凄く偏差値が低そうな説明ではあるが、概ね間違っていないだろう。

ここ、諏訪は、そんな神に守られている。

バーテックスという、あまりにも未知である生物に対して結界なるものを張り、それによって常時襲撃される、といったような事態を防いでくれている上に、白鳥に、勇者としての力を与え、巫女である藤森に神託を授けている。

神から与えられる、この三つの要素によって、この諏訪という場所は守られている。

そのことに僕は、何にも思わない訳ではなかったが、しかし何か思ったところで意味はない。

僕には戦う力なんてものは無いのだから。

あるのは精々、同年代よりも多少、ほんのちよっぴりだけ大人びた精神、それくらいのものだ。

そんな僕に、何の用なのであろうか。

昨日から何度も考えていたことを考えながら、藤森を見れば、彼女は彼女で緊張したように息を吸い込み、そして吐いてからようやく僕を見た。

「さ、さて、夢見くん。私が今日夢見くんを呼び出したのは、とある事情があったからなんだ」

「だろうね、でなきや藤森がたった一人で僕を呼び出すもんか」

で、その事情ってのは？ と尋ねれば、彼女は少し悩んだように目を伏せた。

伏せてから、少しだけ弱々しい声音で言う。

「ええつとね、まず事実だけ言うと、夢見くんに関して、神託があったんだ、」

え、と思わず言葉を漏らす。

その言葉を一瞬理解できなくて、けれどもその直後に言葉の意味を飲み込んだ。

「神託って——あの？」

「夢見くんが何と比べて言ってるのかはわからないけど、うん、そう。ここにいる土地神様からの、神託になる」

「そりやまた……なんで僕なんか……」

素直に思った言葉が、そのまま口から零れるように落ちる。

そんな俺を見ながら藤森は、何故だか申し訳無さそうな顔をした。なんだか嫌な予感がするな、と背筋を流れる汗を意識しながら思う。

「私には良く分からなかった部分もあったんだけど、一先ず伝えられたことだけ先に言っちゃうね」

「あ、ああ、頼む」

僕の返答を聞いた藤森は、んんっ、と喉の調子を整えてから「転生者、夢見真幌へ。次回バーテックス侵攻時、勇者——つまり、うたのんと一緒に戦えって……」
と、静かにそう言った。

004

今から約十一年とほんの少し前のことである。

僕は、この世界に転生を果たした。

今や小説に漫画、アニメでも良く見るような、ありがちかつファンタスティックな設定でしかない”転生”であり、大手を振って言えば頭がおかしいと思われるでも仕方ないようなことなのではあるのだが、とにかく僕は転生を果たしたのである。

誰かの手によって行われた、だとかそういうのは一切覚えていない。

気付けば僕はここにて、夢見真幌、という人間として生きていくことになった、それだけである。

そしてそのことに僕は、特に何の感情も持ち得なかった。

これで前の世界に未練がある、とかそんなことを思えたのであるのなら、もしかしたら何かしらあったかもしれないが、しかしそんなことはなかった。

そう、無かったのである。

とはいえこれで僕が感情の起伏がまるでない、厨二チックな無感情マンと思われたらそれはそれで困るので、一応の理由は説明しておきたいと思う。

端的に言えば、記憶が無いのである。

前の世界の、それこそ生きていた証明とも言うべきその時の記憶が、全く一切合切存在しないのだ。

皆無を通り越して絶無と言っていいだろう。

ただ、以前に歩んでいた人生があった、という実感だけが強くある、それだけだ。

お陰で、前の人生で学んだから勉強も楽々だぜ！ とかそういうこ

ともできない。

ただ不思議と疑うことすらおかしいと思える程の実感が胸の中に存在しているだけなのだ。

そういうわけで、僕としては日常的に意識することも無い程度にはどうでも良いことであつたのだが、しかし土地神様からすればそうではなかつたらしい。

まさか戦え、と言われるとは。

上記の通り、僕には戦う力なんて無いだけだな……。

とはいえ相手は神様だし、何か策があつたりするのか？

そう、たつぷり数秒考えてから、諦めて口を開く。

「神託って……今ので、全部なのか？ 他には何か無かつたの？」

「あ、えつとね、それで真幌くんをここに連れてくるようになって」

「ああ、なるほど。そういうことか……」

直接お呼ばれされていたらしい。

それはつまり、僕がここに来なければならぬ理由がある、ということに他ならない。

それが何であるのか、薄々と察してはいたがしかし、僕に逃げるといふ選択肢は無かつた。

理由は幾つもある。

折角仲良くなつた藤森に格好悪いところを見せたくない、だとか。

神様が実在する以上、逃げたら呪われそう、だとか。

逃げたなんてことを白鳥に知られたら、どんな顔をされてしまうのだろうかと考えてしまった、だとか。

色々あつたがしかし、それ以上に僕は、期待していた。

期待してしまっていた。

それは別に特別な存在になれるかもしれないだとか、そんなことではなく。

ただ、いざとなつた時に妹を守れる力が手に入るのかもしれないという、小さな期待であつた。

「祭壇の方にも行けば良いのか？」

「うん、それで多分、大丈夫だと思う」

その言葉に小さく頷いて、祭壇の方へと向かう。

祭壇は少しだけ荒れていた、恐らく、最初の襲撃の際にこうなったのだろう。

それを見ながらどうしたものか、と藤森を見れば彼女は少しだけ悩んでから「取り敢えずお参りみたいにすれば良いんじゃないかな……？」と言う。

ふむ、そういう感じか、と言われた通りにすれば、直後に僕の身体には稲妻が駆け落ちた。

否、実際に落ちた訳ではない。

落ちた訳ではない——がしかし、それに匹敵すると思えるほどの衝撃が僕の脳天から足先までを貫いていた。

「ぐっ、ああ……!?!」

思わず絶叫しそうになるのを抑えるために服の袖を全力で噛みしめる。

自然と涙が零れ落ちていて、心配したように近づいてくる藤森を手で制した。

痛いとかってレベルじゃない……!

まるで全身がかき混ぜられて、何かを練り混ぜられて造り直されている。

言葉にするのであれば、そんな感覚だった。

「っ……ああ、あ……!」

同年代と比べれば、僕は比較的痛みは我慢できるタイプの人間だ。

記憶も何も無いが、しかし転生した、僕は今よりずっと年上だった頃がある。

そういった不思議な自負から、少しだけ達観したような感覚を持ち合わせていたが故だろう。

が、しかし。

この痛みはそんなものではどうしようもできないものだった。

いや、だって、無理だ!

無理、無理、無理無理無理!

耐えられない、耐えられる訳が無い!

声を堪えることすらもう、できそうにない！

もう、ダメだ——と。

そろそろ意識を保つことすら無理そうだと、薄っすらと思った直後、それは嘘のように霧散した。

フツと、まるで夢か幻だったかのように僕の身体から痛みは抜けて、けれども磨り減った体力はそのまま、僕は「ぐえっ」と受け身も取れずそのまま突っ伏して——そしてプツンと張り切った糸を斬るように、意識は容易く地に落ちた。

005

ふと、眼を覚ます。

稀にある、スツキリとした目覚めのような感覚に近く、けれどもどこか違和感を感じるような目覚め。

自分が自分でなくなつたようで、けれどもやはり自分であるといったような奇妙な感覚。

まるで身体は随分と心地の良い目覚めだと言っているにも関わらず、魂がそれについてきていない。

言語化するなら、そんな感じであった。

まあなんだ。

要するに——

「気持ち悪いな……」

この一言に尽きた。

とはいえ前述の通り、体調事態は万全だ。

故に僕はかかっていた布団をゆっくりと押しつけて、それからまたしてもゆっくりと、視線を張り巡らせた。

と、言うのも。

ここは僕の家ではない——どころか、全く見当もつかない、と言っていいほど見覚えのない部屋だったからである。

一言でまとめってしまうなら、和風の部屋、といったところだろうか。真っ直ぐ視線を向けたその先にある襖から、光が溢れて入ってきて

いるのを見ながら、静かに考える。

うーん、どこ？　ここ……。

「考えられるとすれば……藤森の家、か？　いやでも、まさかな……」
ありえない可能性ではないが、しかしやはりそれは無いであろう。
彼女の家と神社がどれだけ近かったとしても、彼女の力で僕を運ぶ
のまず無理だ。

となればここは――。

そう思うと同時、答えは向こうの方からやってきた。

襖がトン、と軽やかに開かれる。

同時、踏み込んできたそいつは僕を見て、やけに嬉しそうな顔で口
を開いた。

「グッモーニン、随分寝坊助さんだったわね？」

綺麗な声音が耳朶を打つ、けれども同時、僕ははあ、と息を吐き出
した。

「色々あったんだよ、僕だって好きで寝ていた訳じゃあない」

「そう？　その割にはとつてもキュートな寝顔だったけど」

「人の寝顔をマジマジと見るな……」

恥ずかしいだろ、とそう言えば彼女――白鳥歌野は別に、今更のこ
とじゃない、と小さく笑って言った。

いや、確かにそうではあるが、それはそれ、これはこれ、というや
つである。

同い年の女子に寝顔見られるなんてこと、慣れてたまるか。

「まあ、そんなことより、だ。一応聞いておくんだが、ここはお前の
家ってことで良いんだよな？」

「ええ、正解。みーちゃんが泣きながら呼びに来たときは何があった
のかと思っただから」

「あー……悪い、迷惑かけたな」

「ノー・プロブレムだけど……何があったかは、聞いても良いかしら」
その言葉に、当然疑問符が浮かび上がる。

「藤森からは、なにも？」

そう聞けば白鳥はちよつと動揺しちやつたみたいで、と軽く笑って

濁す。

これは相当心配かけたやつだな……別に僕が悪いわけじゃあないが、後で顔は見せにいった方が良さそうだ。

そう思いながらも一度白鳥の顔を見て、それから事の顛末を手短かに話し始めた。

何度でも——それこそ、本当にしつこいくらい言うのだが、白鳥は頭が良い。

それは勇者に選ばれ、学校にも行けなくなったとしても当然変わることはない。

つまり、彼女は僕の思い出しながら紡ぐ、辿々しい説明にもふむむむ、と口を挟むこと無く滑らかに理解していった、ということである。

それが実際、どのくらい理解しているのかは、こちらから聞かずとも、話を聞くにつれて苦々しげな顔になっていくのを見れば、明白なことであった。

要するに、彼女はこの数時間（恐らくではあったが、日の傾き具合からそう時間は経っていないだろうことは確かだった）で起こったことのその重要性に、完璧に気づいているのだ。

となれば、彼女が僕にする唯一の質問は——

「ね、真幌。転生者って何？」

これしか、ないであろう。

この話を聞けば、誰だってそう思うし、聞かれることになるのは避けられないことだった。

当然のことである。

そして、それに僕が上手く答えられるのかと言われれば、それは酷く難しいところでもあった。

いや、普通に考えてほしいのだが同い年の少年、もしくは少女に『別の世界で死んでここにやってきました。記憶はないけど確信はあります』なんて言われてみる。

誰だって、普通に頭がおかしくなったかと思うに違いない。

それほどまでに、この“転生”というやつは荒唐無稽なものなのである。

つまり、ちゃんとした説明をするのがすこぶる面倒くさい。

故に僕はその問いを前にして若干躊躇ったし、少しの思考を張り巡らせた。

どう説明するべきかな、と頭を抱え、それから僕はふう、と脱力して息をその場で吐いた。

見ようによつては溜息にも見えるだろうそれを見て彼女は「溜息を吐くと幸せがエスケープしちゃうわよ」なんて言いたげな顔をしたが、しかし黙って僕を見る。

いや、なんで僕はこいつの台詞を頭の中でシミュレーションしちゃったんだ……。

なんて、余計な思考を挟んでから

「なあ、白鳥。僕には前世の記憶があるって言ったら、信じるか？」

と、如何にも軽い冗談のようにそう言えば、彼女は少しだけ呆けたように口を開けて、それからやはり笑った。

「貴方が言うなら信じるわ、当然でしょ」

そもそも疑う必要がないわ、と。

そこまでストレートに信頼をぶつけられると、いくら僕でもいささか恥ずかしい。

いや、見栄を張ったな。

正直に言おう、めっちゃ恥ずかしい……。

まあ、それも相手があの白鳥であるから仕方ない、とえば仕方なくはあるのだが。

それが彼女の、美德でもあるのである。

信頼には信頼を返す、されてなくても自分が信頼できると思えたらば、信頼を全振りする。

彼女はそういう人間なのだ。

人の悪性を知っておきながら、しかし信じることを続けられる、善の人。

「お前……本当、そういうところだぞ」

「え、何が!? ホワイ!？」

「良い良い、わかった、面倒とか思った僕が悪かった、一から話すから、

飲み物でも持ってきてくれ」

喉が乾いちやつてな、と言えば白鳥は少しだけ苦笑いした後「もう、仕方ないわね」と軽やかに部屋を出ていった。

006

「ふうん、つまり真幌も良くわかっていない、そういうことでオーケー？」

と、全てを聞いた後に白鳥はそう言った。

少しも考える素振りを見せず、ただ淡々と僕の抱えた事実を聞いて、それを深く考慮することもなく——否、するまでもなく、彼女はそう断定したのである。

これで少しでも間違いがあれば可愛げがあつたのだがしかし、凶星も良いところであるのが痛いところであつた。

「ま、そういうことだ。だから今回の神託も、転生も、何が関係しあつてるのかも、僕には正直良くわかつちやいない」

悪いな、と呟けば彼女はうーんと、それこそ女の子らしく、右頬に人差し指を当ててから可愛らしく唸つた。

「土地神様に聞ければ苦労はノーなんだけれども……そうはいかないし、少し仮説を立ててみましょうか」

「仮説、というと？」

「ちよつと強引だけど、それっぽい理屈付けはできるのよね」

この女、本当に言っているのか？

確かに僕は、僕の事情も、神託の内容も包み隠さず、全てを話した訳だが、それでもある情報といえは酷く少なく、また曖昧だ。

それこそ、長年この事情と付き合ってきている僕が、考えることを諦めるくらいには。

そう思う僕を見て、彼女はやはり、不敵に笑う。

「流石にこれは知っているとは思うのだけど、そもそも転生つてのは広義な意味としては、肉体が死んだ後に新たな器を得ること”じゃない？」

「うん、そうだな。それについて異論は無い。」

「私がここで焦点を当てたいのは、じゃあその新たな器——この場合は、肉体のことなんだけれども——は、どこの誰が作ったの？ ていう点」

「そりゃあ——それは、僕の親だろう。人間は皆人間から生まれてくるんだからさ」

「そう、普通はそうね。でも——転生者って、そもそもそんなプロセスを辿る必要があるのかしら」

「……？ どういうことだ？」

「わざわざ”人から生まれる”という過程を辿って、例に習って普通に生まれることに、明確な意味があるとは思えない、そう思わない？」
だって、そこには必ず何者かの——もう、断定しちゃうんだけど、神様の意思が介在しているのだから、むしろポンって既に人として生まれた状態で、この世界に放り投げられていた方が自然だわ。

何故なら神様が転生をさせたのであれば、その器を与える、もしくは創るのもまた、その神様なんだから、と白鳥はそう言った。

これが、それこそ数ヶ月前であれば鼻で笑っただろう。
神様だなんだ、それに近い何かだなんだと言われたところで、フィクションとノンフィクションを混同するなよ、と。

けれども。

今の時代は——その、神様の存在が確立したものになってしまった。

今までは”いてほしい”、”在ってほしい”と思われてきた——語弊を恐れずに言うのであれば、存在していかないものとされてきて、信じようとされてきたものが、ある日ひよっこり”本当にいる”ということを証明されてしまった。

つまり神による不思議な何か、事実あっても別段おかしくない時代になってしまった。

創作だけで楽しまれてきたものが、現実になってしまった、ということなのである。

要するに彼女の台詞を、僕は頭ごなしに否定することができない、ということだ。

理屈としては、荒唐無稽という訳じゃあないのだから。

「だけどそれって——結局、過程が違うだけで結果は転生者が生まれる、っていう結論にたどり着くんだから、そこまで深く考えるところでも無くないか？」

「んー、それはどうかしら。例えば転生者という存在を、バーテックス達の親——つまり、天の神様にバレないように最大限の努力をしたって考えれば、何となく理解できない？」

「それって、意味あるのか？ だって、やつらへの対抗策はお前たち、勇者だろう？」

「ええ、現状は確かにその通り。土地神様から力を、武器を貸して貰って、それでようやく僅かばかりの抵抗ができています。それが勇者。でもわざわざそんな手間かけるくらいなら、生身に直接土地神様の力を与えてもらって、そのまま戦えた方が効率は良くないかしら？」

神の作り出した敵を倒すのに、同じ神の力が必要だと言うのであれば、神の力を直接生身で振るえるほうがずっとイージーでしょう？ と、白鳥は言う。

バーテックスが現れるたびに、勇者の衣装と武器を取りに行っている彼女だからこそ言える、重々しい言葉だった。

「それは……でも、そんなことをしたら、人の身体は耐えられないからこそこの勇者システムだろう？ 土地神が、天の神へ対抗するために考えた、言わば苦肉の策で、だからこそ勇者適性なんてものがあって、それで白鳥は——あれ？」

そこまで言ったところで、僕はふと、言葉を止めた。

勇者が振るう力は——確かに、基を辿れば神様の力だ。

この諏訪を守る為に結界を作り、維持し続けている土地神様の、不思議な力。

それを与えてもらって、貸して貰って、彼女たちは戦っている。

神に直接選ばれた人間が……神が、この人なら力を託せる、この人なら戦えると、そう信じられた人間だけが、勇者となって戦っている。

その選定基準は僕には良く分からないが——それでも、その身に神

の力を宿すことが出来る、ということとは一つの基準なのではないかと、僕は思った。

というか多分、白鳥はきつとそういうことを言っていた。

それを踏まえてみれば、自ずと答えはするりと零れるように口から溢れ出る。

「神に身体を作られた転生者は、ある意味勇者適性100%つーことで、その存在を、土地神様は天の神に悟らせまいとした……？」

「グッド！ そう、それを言いたかったのよ！」

白鳥は僕の出した答えを聞いて、満面の笑みでそう言う。

つまりは、だ。

転生者とは、土地神様が天の神に悟られぬよう、ひっそりと用意していた対抗策、ということである。

基からあつた人の魂を、神の造り上げた器に宿し、それを人と人の間にできた人のように仕立て上げ、いつか来る戦いに備えて用意した。

端的に言えば、土地神様は神の力を最も効率良く身体に宿せる存在がほしかったのだ。

それが偶々僕だった。

もしかしたら僕の他にももっと多くいたのかもしれないが、諏訪で生き残ったのは僕だけだった。

もしくはその中で選ばれたのが僕だった。

それは別視点から見れば、土地神様は転生者、という都合の良い兵が欲しかった、ということにもなるだろう。

けれども僕は、そのことに対して特に何かを思うことはなかった。理由は前述のとおりである。

もしかしたら、その辺も含めて、僕が選ばれたのかもしれないな……。

「まあ、と言っても結構強引な仮説でしかないんだけどね」

今回のその——力の譲渡？ がこんなにも遅れた訳を説明できないし、メイビー土地神様がテキトーに選んだだけかもね、と白鳥は言い切つてグイツと水を煽った。

それに合わせて、一口水を飲む。

多少ぬるくなった液体が、喉を潤して落ちていく。

まあ、確かに。

何だか熱くなってしまうたが、所詮これは僕ら二人の仮説、もしくは妄想でしか無いのである。

二人で語り——というか、白鳥に誘導された形ではあったが——互いが納得し合う、それだけの行為だ。

そこに意味は、特にあまりない。

何せ答えもわからないのだ、だから、あまり深く考えすぎても時間の無駄というものである。

つまり、今のこれが一先ずの答えであると、僕らは結論つけた。

「さて、クエスチョン。真幌がこれからすべきことはなんでしょう？」

一心地ついていた僕に、白鳥は唐突にそう言った。

これから、すべきこと……？

一眠りする、とか？

「ぎんねーん、タイムオーバー！ 正解は戦闘訓練よ、さ、行きましょ

う！」

白鳥は、にこやかに、そして心底嬉しそうにそう言った。

まほろヒーロー 2

007

バーテックス。

あの夏の日、大量に空から湧き出るように降ってきたその化け物たちは、”生命の頂点”という意味を込められて、その名をつけられた。そう、頂点。

生命としての限界、進化し続けたものの成れの果て。進化し尽くした先。

未だ進化途中であると言える、僕ら人類では決してかなわない生命体。

そんな彼らは——所謂、神の遣いだ。

僕ら人類を見限ったという、天の神によって遣わされた無敵のモンスター、それが、バーテックスなのである。

「本当に、僕でも倒せると思うか？」

「ふふ、ノープロブレムよ。安心して、真幌は強いから」

そう言って、白鳥は不敵に微笑んだ。

その顔に、欠片ほども不安は見当たらない。

あれから一週間が経過して、十月十日。

昼を回ってぎつと一時間三十分。

ついにバーテックスは、この諏訪への襲撃を再開した。

その数は、目算で百を超えないくらい、と言ったところだろうか。

ふよふよ空に浮く、巨大な袋に、触手と人の顎だけがつけられた不気味な容貌の化け物——識別名称：星屑——が、結界の外から悠然とこちらへ飛んでくる。

それを僕らは、外界と諏訪を区切る結界のギリギリのラインから見据えていた。

当然ながら、初戦闘である。

ここ一週間、白鳥に連れられ朝から晩まで、それこそ付きつきりで鍛え上げられはしたがしかし、それでも戦えるようになった、とは言い難いだろう。

何せたかだか一週間だし、そもそも白鳥だって別に戦闘のエキスパートという訳ではない。

彼女が戦わなければ諏訪は一夜にして滅んでいた、それを許せなかったから彼女は戦った、そういう成り行きだ。

それでも白鳥がこんなにも余裕そうに振る舞えるのは、持ち前の明るさと、その天才性故だろう。

そして——別に比較するわけではないのだが——僕には特段そんな才能は無かった。

だからと言つて、それを理由に逃げ出すような真似はしないのだが。

それでもまあ、不安くらいは感じてしまう。

だからこそその言葉だったが、しかし白鳥はその点については何一つ心配していないようだった。

信頼されているのか、はたまたダメでも自分が守ればいいと思っ
ているのか。

いやまあ、間違いなく前者であるだろうが。

「そろそろよ。準備はオーケー?」

白鳥は、結界越しに見えるバーテックスを見ながらそう言った。

基本的に僕らはバーテックスの襲来を予測することはできないが、その代わり巫女である藤森が、神託という形で土地神様から襲来を教えてもらい、それを白鳥に——今回からは僕もだが——に伝えることで、何とか襲撃へ対応できていた。

「ああ、問題ない。いつでも征ける」

緊張ごと吐き捨てるようにそう返し、拳を握る。

白鳥の扱う鞭のような武器を、僕は持っていなかった。

「武器は持たない方がグッド——というか、そもそも真幌に武器は必要無いわ」

と、白鳥にそう言われたのである。

「何故つて言えば、それは勿論バーテックス相手にノーマル武器じゃ意味ないから。それに、真幌に武器を使えるような器用さはどこからどう見てもノーじゃない?」

「くっ……」

反論の余地も無いほどのお言葉だった。

だが最後の一言だけは否定させてもらおうか！

僕だって多少の器用さはある！ 家庭科でやった裁縫でも先生に『夢見くんは頑張ってるわね』とお褒めの言葉をいただいたほどだ！

「で、通知表、家庭科のスコアは？」

「……2だ」

イキった割には全然ダメダメだった。

メチャクチャ平均未満である。

い、いや、だけれども！

座学は頑張っているからセーフだ！

「で、テストの方は……？」

「……点数だけで、人の価値を推し量ろうなんて、浅はかにも程がある、そうは思わないか？」

「浅はかなのは何とか言い逃れしようと頭をターンさせてる今の真幌ね」

「うーん、思いの外言葉のキレが凄い」

というか頭を回してるを頭をターンとか言っちゃうやつの方が頭悪そうじゃないか？

まあ、僕はいいつに勝ってるものが何一つ無い訳なのだが……。

「まあ、そんなことよりも」

閑話休題。

「一応聞いておくんだけど、やっぱり僕はこの拳で戦うしかないってことで良いのか？」

「んー、そうね。その五体でしか戦えないっていう解釈で間違いないと思うわ」

足を使うなら靴下まで脱ぐ必要があると思うし、とのことである。

いやまあ、そこまで武器とかに固執していた訳ではないが、ここまです断言されると少々残念ではあった。

「でもその代わりに、上がった身体能力は私以上なんだし、そんなにバッドな話でもないわよ」

「……まあ、そうかもな」

「だからまずはその身体の動きに、意識を慣れさせないとね！ き、もう一フアイトー！」

という感じで、僕らの一週間は速くも過ぎ去りこの日は来てしまった。

気合も勇気も前準備も、特に万端じゃあないがやる気だけはある。鍛えてくれた白鳥と、その協力をしてくれた藤森の期待に応えたい気持ちだつてある。

それだけあれば、充分だ。

そう意気込み拳を握り込み、結界の先に見える、バーテックスを鋭く見据え——

「さあ、私達のショーの始まりよ！」

——そう叫んだ白鳥と、威勢よく飛び出した。

008

白鳥が振るつた鞭が、幾十もの軌跡を残して星屑を打ち据える。

高速で振るわれるそれが、音を鳴らすたびに星屑がまとめて腐食し死んでいく。

それを横目に僕は、ただ、只管に強く地を蹴った。

普通の人走るのと全く同じように、一週間前の僕がそうしていたように。

ただ純粹に、地を駆けるために一歩踏み出した。

瞬間、加速。

踏み出した片足が、地面をへこませて僕の速さを一気に引き上げる。

つまり僕は——そのワンアクションだけで未だ数十メートルはあつた長距離を食い潰した。

無数に見える星屑の中の、その一つの直上へと跳躍して静かに見下ろした。

星屑に表情はない、一見目にも見えなくもない装飾はあるがそれだけの怪物から、しかし焦りのようなものを感じ取り——そして。

「うおおおおおおおおお！」

拳を振り抜いた。

普通の人間の拳であれば——否、どれだけ鍛えた成人男性の拳だとしても、バーテックスの肌には傷一つつけられないだろう。

むしろ、打ち放った威力が高ければ高いほど、その拳が碎ける確率が高い。

僕みたいなの、鍛錬とか筋トレとか、そんな言葉とは縁遠い人間であれば、それは尚更だ。

——だが。

だがしかし、そんな常識は、今の僕には関係が無い。

神の手によって造られたそれらが、人の手では碎けなかったとしても、もう僕に関係はない。

何故なら僕は——既に普通の人では、無いからだ。

まあ、それを後悔とかは、全然してないんだけど、な。

そう思い、放たれた一撃は弾力のある星屑の身体へ突き刺さり——止まること無くめり込んで、碎き壊す。

固くもあり、しかし柔らかい不思議なものを殴ったかのような衝撃と、それを粉々にする感触とともに、天の神の使者を、地へと叩き落とした。

拳に痛みは——無い。

「ふむ……なるほど。確かに結構、いけそうだな」

なんとかか上手いこと着地してそう、ひとりごちる。

——瞬間。

視界は真っ黒に染められた。

は、あ——？

一体、何が——？

思考が一瞬だけ止まる、身体は反射的に逃げようとして、しかし動けなかった。

右足に何かが絡まって……！！

——違う、何か、じゃない！　これ、星屑の、触手——！

や、ヤバ——

そう思うよりも早く視界を埋めた闇——否、僕の全身すらも軽々と呑み込める程大きく開いたその大顎が、急激に閉じ——そして。

光と衝撃が、同時に撓る。

音さえ超えて届いたそれは、何よりも速く星屑を打ち据えて、その身を腐り溶かした。

「慢心しない！」

「わ、悪い！」

そう言つて、ようやく一步後ろへと跳ねて下がる。

心臓の音が、いやにバクバクと鼓膜を打っていた。

吐き出す呼気が微かに震えている。

それを必死に宥めながら、落ち着けと己に言い聞かせる。

大丈夫、まだ大丈夫。

僕はまだ、戦える。

思い出せ、たかだか一週間とは言え、白鳥は懸命に僕を教えてくれた。た。

焦らず、怯まず、思考を止めず、前を見る。

あの日、戦う力を得た僕に白鳥が教えてくれたことは主に二つ。

一つ目は——星屑について。

常に宙に浮いている、移動速度はその気になればかなり速い、一撃でも貫えば戦闘不能になると考えて良い、等と彼女は星屑の特徴を並べ立てたが、その上で彼女は

「星屑の一番怖いところは、学習するところね」

と言った。

ただでさえ数が多いにも関わらず、長引けば長引くほどこちらの動きを学習し、裏を読み始める。

もつと言えば死んだフリすらする星屑さえ出てきたこともあるわ。

だからこそ、その辺が最も厄介なのよね、と。

そしてもう二つ目は——

「真幌の戦闘スタイルは徒手格闘になるから、怖がつてはダメよ」ということ。

それは慎重さを捨てろ、ということではない。

ビビるな、臆するな、ということである。

ただでさえこちらには武器のリーチというものが無いに等しいのだ。

下手に距離を取ること無く、常に接近して一撃で仕留め続けるのが、一番効率的かつ、安全とも言える。

星屑の攻撃は、全て紙一重で躲してやるくらいの心意気で、至近距離での戦闘をすべきだと、彼女は言った。

デンジャーな時は私が守るから、一先ず頑張つて、と付け加えて。であれば、恐れることはないだろう。

迫ってくるそれを、冷静に見据えて的確に身体を——
「つてやっぱ無理——」

無理だった。

というか、無理に決まっているだろう！

あんな巨大なもんが高速で迫ってきてるのにそれを紙一重で……なんて考えていられるか!?

僕はどちらかと言えばアウトドア的行動はしなくもない、程度のインドア人間だぞ！

そんな思いつともに余裕を持って身を捻る、が、それでもすれ違う瞬間に、腕を伸ばした。

目にも似た装飾に指が引っかかり、直後に強烈な重みが腕にかかる。

伸ばしきられた腕が、軋むように悲鳴を上げて——

「う、お、らああー！」

それでも構わず、振り抜いた。

弧を描くように山なりに、力づくで引っ張り上げて——迫ってきていたもう一匹の星屑へと強引に、力任せに振り落とす。

瞬間、回転、跳躍。

足元近くに響く衝撃音を聞きながら、トン、と軽く地を蹴るだけで宙へと浮き上がる。

直後、掠めるように星屑が飛来して——それをそのまま、蹴り落とす。

己の踵が鋭くめり込んで、止まること無く振り切つてぶっ飛ばす。乱回転しながら飛んでいくそれを横目に、着地しながら地を蹴つた。

休んでいる時間はない。

白鳥はさながら踊るように、優雅に余裕そうに星屑を打ち据えて消し飛ばしていくが、僕はそうもいかないのである。

余裕が無い、と言えば嘘になるがしかし、それは身体スペックに全力で寄りかかったことにより発生してる余裕だ。

つまり、身体的な余裕はあるが、精神的な余裕はゼロに近い。

目で見てから動いても間に合うが、その間感じるスリルは馬鹿にならないレベル、ということである。

まるで疲労は無いはずなのに、いやに息が切れるのがその証拠とも言えた。

「後、何匹いるんだ……よー！」

言いながら、拳を振るう。

両の手を重ね、斧のように振り下ろせば、星屑は爆散するように潰れて落ちた。

星屑の真っ白な肉が弾けて視界を埋める、それを邪魔だなど払えば、その先で光が舞った。

幾つにも重なる光の跡が、空を埋めると同時に残った星屑を打ち叩く。

それを思わず呆けたように見れば、振るった白鳥と目が合った。

すると彼女はそつと指さして

「ラスト——任せるわ！」

と叫んだ。

それに応じるように、走り出す。

一步、二歩、と踏み抜いて。

三步目で星屑へと迫る。

「任せるー！」

そう、叫ぶと同時。

僕の拳は、星屑をぶち抜いた。

バーテックスとの戦いが終わった後、僕らは誰かに感謝をされたり、賞賛されることは特に無い。

いや、無いと言い切ってしまうのは少々大袈裟か。

訂正しよう、少しはある。

見知らぬ人々、身近な人々、そして自らの為に戦った僕や、白鳥は、その苦労に反してしかし、貰える感謝は雀の涙ほどだ。

とはいえ、それも仕方のないことだと言えるであろう。

幾ら結界で守られていて、白鳥という勇者がいても、それだけで「じゃあ大丈夫だ！ 何も問題はないな！」と思えるほど、人間は単純ではない。

事実、結界は多数のバーテックスを前にしては心もとないものではあったし、どれだけ白鳥が凄いやつだったとしても、しかし彼女はまだ、十一歳なのである。

そう、十一歳。

未だ義務教育すら終えていない、小学生なのである。

それが示す意味とはつまり、同情は買っても信頼はされない、ということに他ならない。

この狭い世界で、いずれ全員死んでしまう、と。

あの日、この結界内に避難できなかった人たちのように、自分たちも無残に殺されてしまうだ、と。

そういう未来が待っているのだろうか、と。

この諏訪にいる人間のほとんどが、そう思っていた。

白鳥や藤森、そして僕のように、生き残ろうと必死になっている人間の方が圧倒的に少数派であるということだ。

いやまあ、だからと言って、初参戦の僕はともかく……この数ヶ月戦い続け、そして皆へと声を掛け続けている白鳥には労いの言葉の十や二十は、あつてしかるべきだとは思うのだが。

「賞賛の言葉なんて必要ないわ、だって私は、私がそうするべきだと思うから、私がそうしたいと思うから、こうしているんだもの」

と、白鳥はそれでもそう言った。

まったく、惚れ惚れするどころか、若干引きそうになるくらいの善人である。

まあ、だからこそ勇者なんて役に選ばれた……もしくは選ばれてしまったのだらうが。

「そんなことより、畑を耕しに行きましょう！ さあ、アリーアリー！」

「いや、少しくらいは休ませろよ……」

「ノンノン、そんなんじやダメよ真幌。作物は人間に合わせて待つてくれはしないのよ？」

みーちゃんも待つていることだし、と。

そう言つて彼女は歩み出したが、しかし直ぐに止まり、ゆつくりとこちらへ振り返る。

「……どうかしたか？」

と、その声をかけるがしかし、白鳥は構わずこちらへと寄つてきた。な、何だよ、おい、真顔でこつちに近寄ってくるのはよせ、ちよつと怖いだろ!?

思わずそう思うのと、白鳥が僕の右腕を持ち上げるのはほとんど同時のことだった。

軽く、しかし鈍い痛みが肘を駆け抜ける。

「——っ」

「……痛みは？」

思わず声を漏らしてしまった僕に、白鳥は真つ直ぐと見据えて静かに言った。

言い逃れは……ちよつと難しそうだ。

まったく、目敏いやつめ。結構上手く隠せていたと思つてたんだけどな。

「ちよつと痛むくらいだよ、放っておけばすぐに良くなるさ」

「本当に？ 診てもらわなくても——」

「問題ない、治癒能力まで上がったの、知ってるはずだろ？」

そう言つて、ゆつくりと白鳥の手から腕を離す。

流石にもう隠している必要もないし、僕は無事な方の手——つまり左手で、右肘を静かに支えた。

支えてから、まあこのくらいならもうすぐ治るな、と確信を得る。今も言った通り、あの日僕が得たものは、高度な身体能力だけではない。

それこそ、勇者になった白鳥と同じように、普通では考えられないほどの身体の……所謂治癒力というやつが高まったのだ。

といっても、あくまで治りが早くなる、と言った程度で、致命傷等だと焼け石に水くらいなのだが。

それでもこの程度なら怪我の内にも入らない。

だからこそ黙っていたのだが、白鳥の目は誤魔化せなかったらしい。

さすが、と言うべきだろうか。

観察能力が高すぎると舌を巻くべきか。

まあ、どちらにしるすげえと、そう思う。

「うーん、ま、それならオーケー！でも良くならなかつたら直ぐにお医者様に診てもらおうのよ！」

と言って、彼女は僕の腕を取る。

！
勿論、痛みの残る右腕ではなく、無事な左腕の方だ——じゃなくて

「なんで腕を取る!？」

そうやって彼女を見るがしかし、白鳥は薄く笑みを浮かべたまま問答無用で腕を引きながら言った。

「だって、貴方エスケープしちやいそうな顔してるんだもの」

……いや、何で分かるんだよ。

勝手に僕の思考を読み取るのはやめろ！

「ふふ、本当に嫌なら顔に全部書くのをやめることね」

「ええ……僕、そんなに顔に出ていたか？」

「自覚なかったの？」

「あつたらとづくに直す努力をしているんだよな……」

「でも、そこが真幌のグッドなところだから、直さなくても良いのよ」

そう言つて、白鳥は笑つた。

僕としては未だに反論してやりたいことはあつたがしかし、その笑みを見ればそれも下らないように思え、「はいはい」と適当な返事をしながら歩みを進めたのであつた。

010

午後三時。

戦闘が終わつた後に僕が向かつた先は結局、畑ではなかつた。

いや、確かに畑作業は滅茶苦茶遠慮したかつたが、別に逃げてきたとかそういう訳ではない。

嘘でも何でも無く、きちんとした予定を僕は入れていたのである。

白鳥は「少しでもオーケーだから……！」と粘つたがこればかりは譲れなかつた。

まあ何だ。

見舞いというやつだ。

今日も今日とてベッドに横たわり、本でも読んで時間を潰しているであろう、妹の元へと僕はやってきた、という訳である。

もう数えるのも馬鹿らしいほどぐぐつた自動式の扉を抜けて、受付の人へ頭を下げてから階段をゆつくりと登る。

極稀に、テンションが高い時は衝動に任せ、駆け上ることもあるのだが今は特段、そういう気分ではなかつた。

いやまあ、病院は静かに、が基本だから普通にやってはいけないことなのではあるのだが……。

僕だつてまだ十余年程度しか生きていない小童なのである。

どうか許してやってほしい。

「いや君大体走つてるでしょ、何を偶にしかやらないみたいなのを装っているんだ……」

分かつてるんならやめてよね、という声が続いて響く。

聞き覚えのある声だ。

そう思つて振り向けば、入ってきたのは黒が強い茶髪に、キラリと光つたメガネの男性。

真つ白な白衣を羽織っており、その風貌は正しく”病院の先生”と呼んで良いだろうその人は――

「いやだな、精々週に五回くらいしか走ってな――って、先生じゃん」当然、この病院の先生であった。

名を、御門という。

昔から柑菜共々お世話になっっている人である。

……バーテックス襲来後からは、特に。

まあ、僕らは親もいなくなっちゃったし、その関係だ。

こんな世界では、大人も子供も路頭に迷ってるようなものであるがしかし、流石に子供だけで過ごしていけるような環境ではない。

少なからず、大人の助力は必要不可欠という訳である。

「やあ、無事で何よりだ。パツと見怪我はなさそうだけど、身体に異常は無さそうかい？」

そう言っつて先生は僕の身体を問答無用で触れ始めた。

普段なら「いやいきなり何!?! 全然大丈夫だよ!」とでも言うところだが、今回に限って僕はそうしなかった。

と、言うのも先生は白鳥と藤森以外で唯一、僕が戦うことになったことを知っている人だからである。

別に隠している訳でもないから、その内諏訪で知らない人はいなくなるだろうが。

だからまあ、その関係で、先生は僕の身を案じていくれているのだった。

訓練以外――つまり、戦闘で力を使うのは初めてだったし、そもそも戦うということ自体が初のことである。

僕もそうだったが、先生も先生で相当緊張していたのだろう。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ、先生。何だかんだ、白鳥の教えは良かったらしい」

先程まで痛めていた方の腕をブンブンと回してそう言い放つ。

此処に来るまでの数十分の間に、すっかり痛みは完治していた。

土地神様様である。

そんな僕を見ながら、先生は少しだけ唸ったが、それでも僕の言葉

を信じてくれたのかゆつくりと手を離す。

……いや、これ普通に触診終えただけだな、割と満足そうな顔してやがる……。

「うーん、確かに。一応問題は無さそうだけど……痛みとか、痛みまでいかずとも微妙な違和感とかはあったりしないかい？」

「今のところは、特に。戦闘直後にちよつと腕を痛めたけど、今見た通り、既に完治したしね」

そう言つて、一応右腕を見せる。

それを先生は興味深そうに見た後に、「確かになんとも無さそうだ……。」と呟いた。

「だからまあ、初戦闘は完勝だったってとこかな。だから次も大丈夫だろうさ」

「油断大敵だ、本当に、気をつけてくれよ」

「分かってるよ、僕だつて死にたくはないからね」

そう言えば、先生は少しだけ目を伏せて、それから何か言おうとして、やはりやめた。

その一連の行動は少しだけおかしくて、けれども酷く僕の心に深く落ちてきた。

—— 幾ら僕だつて、そこまで鈍くはない。

先生が、僕に戦つてほしくない、と言おうとしたことくらい、僕にだつて分かる。

だが、そういう訳にはいかないことくらい、承知しているからこそ先生は言うのをやめたのだ。

だからこそ。

それが分かるからこそ、僕は口を開いた。

「大丈夫だよ先生。僕は、僕の意思で戦うことを決めた。先生からしたら、不安かもしれないけど、少しくらいは信じてもらつて構わないくらいに僕は、強いっばいからさ」

だから、大丈夫、と。

繰り返して言えば先生は一瞬だけ泣きそうな顔を浮かべてから小さく

「すまない……私は、君を止めることは、できない」

と、そう言ってから少しだけ頭を下げた。

代わりに、少しでも怪我をすれば、私が最優先で見よう、と。できれば、そんなことが無いことを祈っているが、とも。

重ねて言って、先生は項垂れた。

ただ、僕にとっては言葉そのものよりも、僕を思ってくれていることが嬉しくて、少し笑った。

笑って、言った。

「ありがとう、先生」

そんな僕を、やはり先生は申し訳無さそうに見たが、関係は無かった。

僕は僕の信じる道を進むだけなのだから。

「それじゃまたね、先生」

そう言って僕は、リノリウムの床をキュツと鳴らして階段を駆け上がる。

後ろからかけられる、階段を走るんじゃない、という声を期待してみたが、しかし、やはり聞こえはしなかった。

が、今はそれでいいだろう。

このことは徐々に慣れてもらえば良いだけだ。

そう思い更にスピードを上げれば――

「こらっ！ 病院を走るな――！」

普通に看護婦さんに怒られた。

当然である。

しかしそんなことも気にせず駆ければ目的地まではあっという間であった。

五階建て病院の、その三階。

部屋番号三〇三。

僕の妹が、いる部屋である。

そこを大した緊張感もなくスライドして開ければ、当然ながら妹はそこにいた。

僕を見て「やっほー」と手を挙げる。

それに合わせて「よう」と言いながら椅子を持ち、ベッドの横へとつけた。

「今日は中々遅かったねえ、何かあったの?」

「ん、まあ、結構激しめな戦闘をしてきてな。まあ見事に快勝だったんだけど」

「ふうん、そっかそっか。で、どうだった? やっぱり強かった? 山田くん」

……?

「いや、誰だ……!?!」

「あれ、覚えてない? 隣の家の子山田くん」

「うちの隣は佐々木さんだ!」

そう言えば柑菜は「あれえ? そうだったっけ」と快活に笑った。

今日は随分体の調子が良いらしい、出会い頭に意味不明なことを言っただけで来たのがその証拠である。

そのことを一人の兄らしく嬉しく思い、同時に気まずく思う。

何せ、僕はこれからその笑顔に陰りを差すようなことを話さなくてはならないからだ。

そう、一週間前から、この日までのことを。

そしてこれからのことを。

僕は話さなくてはならない。

この世界にたった一人だけ残った家族に、僕は、最も死が近い場所に身を置くということ、伝えなければならぬのだ。

「で、誰に勝ってきたって? 山田くんじゃないなら……そうね、石上くんとか?」

「いやだからそいつらは誰なんだよ……まったく、あまり茶化すな。バーテックスだよ、バーテックス」

「へえ、バーテックスか……。ね、お兄ちゃん、幾ら白鳥さんに守られっぱなしなのが嫌だからって、妄想を語りだすのはやめようよ」

「僕を現実と妄想を混合しちゃうちょっとヤバめの人にするのはやめろ!」

興味なさげというより、完全に憐れみのこもった眼差しだった。

普通に余計なお世話である。

いや、まあ、妄想等混じっちゃいけないから、お世話ですらないのだが。

「だって……勇者でも無く——そうでなくても、ちよつと走っただけで息を切らすお兄ちゃんが戦うなんて、設定にしても無理があるよ」「まあ、それはマジでその通りではあるんだけどさ……」

もうちよつとお兄ちゃんという言葉を信じてみない？

一ミリたりとも信用されなくて、お兄ちゃんちよつと泣きそうなんだけど……

「ちよつと、泣くとかやめてよね。私が泣かせたみたいになるじゃん」「いや、みたいじゃなくてその通りなんだよー」

責任から逃げようとするんじゃない。

そう言うてから、コホンと咳払いを一つ。

ふわふわとし始めた雰囲気を通り切るように。

これ、結構真面目な話なのである。

「なあ、柑菜、ふざけずに聞いてくれ」

「私はいつも本気なんだけど……まあ良いや、何？」

「今の話は、マジだ」

「……マジで？」

「超マジ」

と、そこまで言えばようやく柑菜の表情が引き締まる。

先程までほにやほにやと変動させていた表情を真顔に固定して、鋭くなった目線で僕を見据えた。

「最初から、省略しないで全部話して」

「当然だ」

今日はそのために来たんだからな、と言ってから僕は、全てを話し始めた。

一週間前から今に至るまでの何もかもを語った。

実際に戦って、全然平気ではあったということを強調しながら、そのままの事実を。

僕としては、どう反応されるものかと少々ビクつきながら話してい

た訳だが、それに反して柑菜は至極静かであった。

僕の紡ぐ言葉の、その一片すら取り零さないと言わんばかりにそつと目を瞑り、一度たりとも口を挟まずに聞いていく。

その姿はとても新鮮で、そして、少し怖くもあった。

何故そう思ったのかは、自分でもよくわからないが、それでもそう思わせるだけの何か、今の柑菜にはあった。

そんな不思議な何かを感じ取りながら、話しきれば柑菜はやはり目を瞑ったままだった。

ちよつとだけ眉間に皺を寄せ、何かを考えるように額に手を当てる。

その間、僕らは互いに無言であった。

僕にこの静寂を破る勇氣はなかった、とも言う。

そんな状態が、どれだけ続いたのだろうか。

時計を見ることすらも何故だか遠慮してしまって、正確な時間が分からない。

ただ日が沈みかけていることから、少なくとも僕がこの部屋に来てから一時間は優に過ぎていることだけが分かった。

まあ、時間が分かったところで何かある訳でもないのだが。

ちよつと空気が気ままずすぎて気が散ってしまうのだ、仕方ない。

「……そっか。うん、分かったよ、お兄ちゃん」

そんな中、不意に柑菜がポツリと、眩くように言った。

その言葉の真意を理解できなくて、ただ疑問符を浮かべれば、彼女は続けて口を開いた。

「私は——私はね、率直に言っちゃえば、お兄ちゃんにそういうことはしてほしくない。ママもパパもいなくなっちゃって、この先お兄ちゃんまでいなくなるかもって思うと正直、不安で指先が震えてくる」

「それは——」

と、口を挟もうとして、けれどもそれは失敗した。

柑菜がそつと指を一本立てて、己の口に当てる。

今はただ聞いてと、そう言っつて。

「だけど……だけどね。お兄ちゃんが決めたことなら、私は止めない

よ。だってお兄ちゃんは、自分で決めたことは中々曲げない面倒な人だし、それに——私を残して死ぬなんて、絶対にしないでしよう？」

それは、清々しいまでの信頼に満ちた言葉であった。自分の細く、白い指をギュツと握って、「ね？」と首を傾けて、柑菜は僕にそう問いかけた。

その眼差しは、少しだけ揺れていて、けれども決意が目に見える。今の言葉が本当に心の奥底から生まれたものであると、証明するよ

うに輝いていた。

だからこそ僕は、少しだけ深呼吸してから、同じくらいの気持ちを込めて目を合わせた。

どこまでも真剣に、ゆつくりと。

僕は言う。

「——当然だ。僕がお前を残して逝くなんて、ありえない。何せ僕は、お前の兄だからな」

そう、気丈なように返したつもりだったがしかし、言葉の端が少しだけ……本当に少しだけ震えたように思う。

そのことを取り繕うように言葉を重ねようとしたが、しかし諦めた。

これ以上の言葉は蛇足だと、理性がそう言っていた。

「へへへ、流石お兄ちゃん。信じてるからね」

「ああ、良く見とけ、お兄ちゃんは絶対に負けないし、死なないからさ」

011

翌日。

午前十一時（くらい）。

昼間。

本来——平和に時が過ぎていた場合——であれば、普通に学校へと通い、眠い目を擦りながら授業を受けているであろう時間、僕は上社本宮にある、参集殿と呼ばれる場所にお邪魔していた。

当然、僕一人という訳ではない。

参集殿には僕の他にももう二人、同い年の人間がいた——という
か、白鳥と藤森である。

勇者と、巫女。

そして転生者。

この三人がわざわざ仰々しく集まるのだから当然、只事ではない。
とはいえ、緊急性があるとか、そういう話ではない。

が、しかし僕らのような——その、なんだろうな。

神様からの声を聞き、神様の力を授けてもらい、戦っている、いわ
ば常人ではない僕らがしなければならぬことが、ここにはあったと
いうことだ。

僕ら、というか、正確には勇者である白鳥が、であるのだが。

まあなんだ。

何だか結構勿体ぶってしまったが、本当に、言うほど大したことは
ない。

所謂——定期連絡、というやつである。

諏訪の勇者である白鳥は、ここ、参集殿にある通信設備を用い、定
期的に四国と連絡を交わしていた。

まあ、定期的とは言え、連絡自体はつい最近から始めたばかりなの
で、まだ三回目とか、そのくらいなもののだが。

また、何故四国なのか？ と問われればその理由は至極簡単なこと
で、今、僕らに分かっている国内で無事な地域が、四国しかないから
である。

四国にはここ、諏訪と同じように土地神様がいて、また同様に勇者
がいるのだ。

といっても、諏訪よりもずっと安全ではあるのだが。

なにせ諏訪を守る神は一柱であるのに比べ、四国は何百もの神が集
まった集合体を守っているからである。

更には勇者の数も、こちらの五倍。つまり五人いる。

そういうことから、四国は此方よりずっと安全が確立されていた。
で、今。

僕はその連絡に初めて参加させられようとしていた。

次回からは自由参加でオーケーだけど、一緒に戦う以上その情報共有はしときたいし、挨拶くらいはしとかないとね？ とのことである。

これは流石の僕も、余計なお世話だと一蹴することはできなかった。

その必要性は僕にだって理解できるものであったからだ。

まあそれと普通に面倒だと思う気持ちはまた別なんだが……。

僕はあまり、コミュニケーションというやつが得意分野ではないのである。

どちらかと言えば授業を抜け出し屋上で昼寝しちゃうタイプに近い。

もしくは教室の隅でいつつも寝ているやつ。

「さて、そろそろね、準備は良い？ 真幌」

「あー、いや、ええ……やっぱり、僕もいなくちゃダメか？」

「オフコース！ むしろ今日は貴方を紹介する日なんだから絶対に必要よ！ ほら、もっとシヤンとして！」

「が、頑張つて、夢見君」

「いや、頑張るようなことも、無いとは思っただけどさ……」

やっぱり緊張しちゃうんだよな、と呟くように言う。

ただでさえ、連絡相手は見知らぬ、それも勇者なのだ。

つまり、女子である。

異性、なのである。

……普通に、逃げ出したくなるのも、許されるといふものだろう。

そもそも僕は、そこそこ関わりが長くなってきたにも関わらず、未だに白鳥とも藤森とも上手い距離感を測りかねているようなやつなのだ。

言い訳をするわけじゃあないんだが、白鳥は物凄いグイグイくるし、逆に藤森は引つ込み思案過ぎて、イマイチどうすれば良いのかわからないんだよな……。

因みに、この二人以外で、関わる異性と言えば僕にはもう、妹しかない。

クラスの女子？ はは、いないものを強請っても、しようがないだろう。

「まあ良いや、なるようになるだろ。うん、そう思うことにする」
「それで、大丈夫なのかなあ……」

「不安になるようなことを言うのはやめてくれ、藤森……」

折角奮い立たせた勇気が萎びれちゃうだろ。

そう言えば藤森は少し笑ってごめんと言った。

こいつ、僕をちよつとからかいやがった……！

「さ、通信繋ぐわよ。真幌、もつとこつちに寄って」

「ええ、そんなに近寄る必要があるのか？」

「そうしないと真幌のスモールボイス、入らないのよ」

「スモールって言うな！」

そんな僕の声を聞き流し、強引に引き寄せた白鳥はそのまま通信設備にある、一際目立ったボタンをポチリと押した。

抗議しようとする、僕へ「しーっ」と人差し指を立てながら。

……くつ、不覚にもときめいた……！

藤森もそうだが、この勇者巫女コンビ、基本的にその、なんだ。

可愛いから、尚反応に困る。

参ったものだ。

そんなことを思っていれば、不意に設備から『ジ、ジジ……』と電子音が鳴り始め、やがてそのノイズも消え、誰かの息遣いが聞こえてきた。

それに少しだけビクつけば白鳥は、受話器のようなマイクを近づけ口を開いた。

「諏訪より、白鳥です。勇者通信を始めます」

『香川より、乃木だ。よろしくお願いする』

聞こえてきたのは、凜として落ち着きのある、およそ僕の記憶にはないタイプの女性の声だった。

のぎわかば、と聞いたばかりの名前を、持ってきたメモ帳に書く。こうしておけば忘れた時に見ることで思い出せるという訳だ。

また、同様に今日の連絡内容もメモしておけば、後で何かの役に立

つかもしれないし……それに、柑菜に話すネタになる。

そう考えていれば、白鳥がちよいちよいと僕の脇を突つついた。

お前も挨拶しろ、ということなのだろう。

それに僕は反射的に、すこぶる嫌そうな顔を浮かべた後、マイクを手にとった。

「あー……諏訪の、夢見だ……です。今回から勇者である白鳥と共に戦うことになりました、よろしくお願いします」

と、慣れない敬語を使つてそう言う。

正直、敬語にすべきかどうかは迷つたのだが、結局白鳥に倣うことにした訳だ。

『戦うことに……？ 新しい勇者、ということの良いのか？』

「いや、違います。ちよつと説明が面倒だから……なので、後でも良いか？ じゃない、良いですか？」

が、最早慣れない、というレベルではなかった。

ただでさえ一番敬語を使う相手だった先生にですらもう大分抜けてきているのである。

今更取り繕うとしても、普通に無駄であった。

通信の先から、少しの笑い声が聞こえてくる。

「ふ、はは。君は——夢見さんは、どうやら敬語が達人ではないらしい。何、問題ない。私には敬語抜きでも構わないさ」

そも、私もちゃんと使えていないのだからな、と。

「あ、マジか？ それは助かる——つて、お、おい、白鳥。そう睨むな」

小声で白鳥にそう言えば、彼女は「一応、勇者の公式な仕事なのよ？」と言つたがしかし、「真幌だし、仕方ないか……」と軽く嘆息した。

おい、それはどういうことだ。

ていうか藤森、ちよつと笑いを堪えてるのバレてるからな！

まったく……と、そう反論したかったが今は置いておくべきだろう。

グツと言葉をおさえ、マイクに声を当てる。

「それじゃ改めて、夢見真幌だ。夢を見ると書いて夢見、真実の真に幌馬車とかの幌で、真幌と書く。よろしくな」

「そうか、ではこちらも改めて。乃木坂の乃木に、若い葉と書いて、乃木若葉だ、よろしく頼む」

「スーッと、メモに書いた」のぎわかば」の字に線を引き、その上に「乃木若葉」と記す。

それから横に、思いの外話しやすそう、と付け加えてからもう一度口を開いた。

「おーけーだ、それじゃあ、さっきの話なんだけど、結構説明が面倒だから、一先ず……ええつといつもやってるやつ——」

「定期連絡ね、互いの被害状況とか、侵攻頻度とかの連絡」

「そうそれ、定期連絡の後でも、良いと思う。ていうか正直、白鳥から聞いてもらった方が早いと思う。このことについてちや、何だかんだ白鳥の方が早いし詳しいままであるからさ」

「ふむ……そうか、いや、そちらがそう言うのであれば、こちらとしても問題は無い。では先に、状況確認から行こうか」

乃木がそう言うのを聞いてから白鳥とマイクを代わる。

「そうすれば白鳥は随分と丁寧な口調で喋り始めた。」

「こ、こいつ、敬語をマスターしてやがる……!」

「そう思い藤森を見れば彼女は「ちよつと似合わないよね」と笑った。……まあ、確かに。」

「同い年である僕と比べ、随分と達人なその語り口調は、見ようによつては酷く違和感を覚えるものだった。」

「が、しかしそれはそれとして、認めるのも癪なのだが、これがまた中々板についていた。」

「白鳥の器用さが伺えるというものだ。」

「が、まあじつと見ていて楽しいものでもない。」

「まあつまり、ちよつと暇、ということだ。」

「なあ藤森、これについてつともどのくらいやってるんだ?」

「故に僕は、同じように手持ち無沙汰そうにしている藤森へと声をかけた。」

「白鳥から離れ、グツと近づいて座る。」

「そうすれば藤森もこちらを見て口を開いた。」

「一時間くらいかなあ、それ以上ダラダラと喋ったりとかは今のところ無いよ」

「へえ、それはちょっと驚いたな。一時間もこの報告続くのか？」

と、チラリと後ろを見れば、未だに言葉を交わし続けている白鳥の姿。

一時間も、これをしているのか……

そう思えば藤森は「あ、違う違う」と否定した。

「状況確認自体はね、直ぐ終わるんだけど……四国の乃木さんとうたのん、結構馬が合うみたいで……」

「ええ、乃木さんは結構まともそうな印象うけたんだけど……」

あの白鳥と同じで、変人カテゴリに入る人間なのか……？ と、小さく呟いた僕にこれまた、藤森は否定した。

「ええっとね、正確に言えば、どちらも好きのゴリ押しが強いと言うか……」

そう、口火を切った藤森曰く、あの二人、初めての通信で世間話をし始めた挙げ句、うどんと蕎麦、どちらが優れているかの論争を始めたらしいのだ。

勿論、うどんは乃木で、蕎麦は白鳥である。

前回も前々回も、それにほとんど時間を費やしたのだとか。

……いや、くそほどどうでもいいな……。

思わずそう言った僕に、僕らの話が聞こえていたのか、後ろから声が突き刺さる。

「その考えはとつてもノーよ真幌！ 蕎麦の方が断然優れているに決まっているんだから！」

白鳥の鋭い声が参集殿に響き渡った。

当然、それほどの声で言ったという事は――

『何を愚かな。うどんと蕎麦、比べるまでもなくうどんの方が優れているに決まっているだろう』

通信先の、乃木にも聞こえているということだ。

確かにこの二人、相気が合うらしい。

主に面倒くさい方向で。

「まあ僕はどちらかと言えばうどんが好きだな。うどんの方が歯ごたえがあつて——」

だがまあ、ここは話に乗るもの一興かと思ひ、そう言いかけたがしかし、それは遮られた。

否、遮られたというか、塗りつぶされた。

それは誰にか、と言えば——

「真幌の裏切り者く〜!?!」

当然、白鳥であつた。

いやすまんな白鳥。

僕、別に蕎麦が好きつて訳じゃないんだ。

そう言えば通信の先から『よしっ!』という、至極嬉しそうな声が聞こえてきたし、白鳥が酷く顔を顰めた。

……ああ、これはまた、面倒なことをしてしまったな。

と、僕は静かにそう思った。